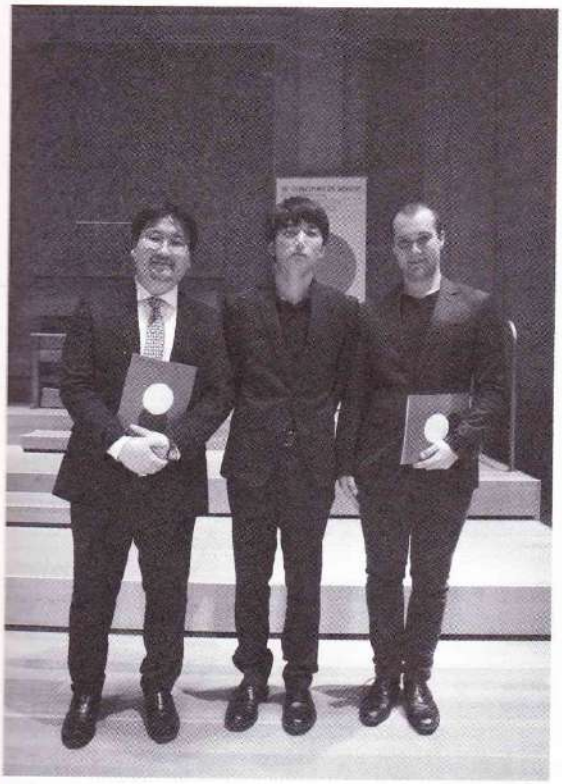
ジュネーヴ国際音楽コンクール作曲部門第2位に中橋祐紀

10月26日、ジュネーヴ国際音楽コンクール作曲部門のファイナルコンサートがジュネーヴ音楽院フランツ・リストホールで開催された。中橋祐紀のほか、チェルヴェナク・アルミン（ハンガリー）、キム・シン（韓国）のファイナリストが作曲した6声のヴォーカル・アンサンブル曲をノイエ・ヴォーカルゾリステン・シュトゥットガルトが世界初演した結果、第1位はキムが選ばれたものの、中橋は第2位のほか、「若い聴衆賞」、「大学生聴衆賞」、「Nikati De Luze財団賞」（Nikati De Luze財団＝スイス人やスイス居住の音楽家の学業や作品普及をサポートする財団）を獲得した。第3位のチェルヴェナクは「一般聴衆賞」も受賞した。審査委員長は結果発表前に「甲乙つけがたい、困難な審査だった」と強調し、会場からも同様の声が聞かれた。中橋の《Settings》はJ・S・バッハのカンタータに着想を得た作品だというが、日本人には「声明（しょうみょう）」を想起させる部分もある。発表を待つ間にその点を尋ねてみると、とくに宗教的な思いで作曲したわけではないが、人間は声を使って、深い部分にあるなにかを表現したいと思うものなので、それが神だったり、深層の意識だったりするのだろうという話を興味ぶかく聞いた。それがティーンエイジャーから20歳代にまでアプローチできたという点でも、中橋の今後の活躍が望まれる。


ジュネーヴ国際音楽コンクールファイナリストたち。左からキム、中橋、チェルヴェナクの各氏 ©Anne-Laure Lechat

二人のディーヴァ

今月のチューリヒ歌劇場では、「ディーヴァ」について考えさせられた。現代のディーヴァといえば、まずはアンナ・ネトレプコの名が挙がったであろうが、ロシアのウクライナ侵攻後、突然そのポストに穴が空いた。現在その穴を埋める候補になり得る一人、オルガ・ペレチャッコのリサイタルを、10月17日、チューリヒ歌劇場で聴いた。

チューリヒ州の秋休みと重なったせいか、半分ほどしか埋まっていなかった聴衆ではもったいないほど充実したプログラムだった。前半はまさしく、伴奏のセムジョン・スキギンをロベルトに、自分はクララになりきって、出生から死までの物語のなかにシューマン夫妻とブラームスの歌曲を歌い、後半はポリーネ・ヴィアルドのサンクトペテルブルクでの成功と、彼女に魅せられたツルゲーネフの物語に仕立て、ヴィアルドの当たり役や自身が作曲した歌曲で構成されていた。一晩中、朗読と歌で声帯を使い続けながら、全力を傾けたプログラムだった。

その前日は、「当歌劇場のディーヴァ」の一人といえるエレナ・モシュクをヴェルディ《トロヴァトーレ》再演で聴いた。カーテン・コールではディーヴァなみの喝采と花束を贈られたものの、音程、テンポ、高音と低音との狭間で戦い続けながら、やっとの様子で歌いきったレオノーラだった。当歌劇場から世界へ羽ばたいたといえる彼女は、冷たく聴こえるほど歌唱技術にフォーカスを当ててキャリアを積んできたが、更年期前後のレパートリー変更は軽めのソプラノの正念場であり、彼女も例外ではないようだ。主役のステファノ・ラ・コッラは輝かしい響きを持っているのだが、技術的限界も見える。ルーナ伯爵のアルトゥール・ルジンスキーは安定した高音と驚くほど長い息のコントロールで長いフレーズを歌えるのだが、音楽的動きが止まっているため、ベタ塗りのようでヴェルディ・レガートとは言えない。指揮のパオロ・カリニャーニもなす術がないのか、緊張感がない音楽が流れていく。アズチェーナ役のユリア・マトチキナとイネス役のボゼナ・ブイニッカは好演した。

チューリヒ歌劇場のニュースとしては、6月号の当欄でレポートしたシュテファン・ヴィルト（1975年生まれのスイス人）作曲《真珠の首飾りの少女》世界初演が『オーパンヴェルト』誌の「最優秀世界初演賞」を受賞した。

トーンハレ管と初共演のユッセン兄弟とマチェラル

ルーマニア人指揮者のクリスティアン・マチェラルがチューリヒ・トーンハレ管弦楽団デビュー公演に選んだのはエネスコ《ルーマニア狂詩曲第1番》で、同郷の作品として恐れることなく楽しむことに徹し、遊園地のようだった。続くバルトーク「打楽器と2台のピアノのための協奏曲」では、バルトークらしい響きにこだわらず、ユッセン兄弟の個性とピッタリ合致した緊張感あふれるモダンな共演を聴かせた。アンコールでは一変して、J・S・バッハをしっとり弾き終えた兄弟は、二面性もアピールした。休憩中のサイン会で誰とも隔たりなく会話する彼らは、クラシック界の将来に大きな役割をはたせることだろう。休憩後のドヴォルジャーク「交響曲第8番」も独自のアプローチで、マチェラルの今後の活躍にも期待したい。

ツィメルマンがルツェルン公演をキャンセル

10月6日、ルツェルン・カルチャー・コングレスセンターに出演する予定だったクリスティアン・ツィメルマンは病欠し、公演は来年に延期された。同じく去年の公演を10月7日に延期したイゴール・レヴィットのリサイタルはチケットの払い戻しも少なく、当日は完全に残席ゼロで、所見が叶わなかったほどのブレイクとなっている。